

「最上町の青少年健全育成への取組」

最上町

1. はじめに

令和4年度の青少年健全育成事業は、主に青少年育成推進員会、最上町青少年育成町民会議の2団体と協力して活動を行っている。今年度の青少年育成推進員は6名、最上町青少年育成町民会議は役員が12名。活動の内容としては、あいさつ運動や夜間のパトロール、列車指導、最上町青少年育成町民会議の独自事業である。

2. 活動方針

今年度の最上町青少年育成町民会議の活動テーマは「笑顔さく みんながつながる最上町」。このテーマは、令和3年度に募集した標語コンクールの最優秀賞作品である。青少年だけでなく、老若男女問わず笑顔にし、みんなで青少年を見守る町にしていきたいという意味を込めて、テーマを決定した。

いじめ防止、あいさつ、声かけ運動や青少年の主体的な社会参画活動の推進、学校、PTA、地域関係団体との連携強化などを活動の重点において今年度活動を行った。

3. 具体的な活動

(1) 青少年育成推進員の活動

青少年育成推進員の活動は、あいさつ運動や夜間パトロール、列車指導、各種大会参加となっている。あいさつ運動は毎月第3水曜日に最上駅で行っている。偶数月は夕方に、奇数月は朝の始発にあわせて実施している。その際、いじめ防止標語のチラシが入ったポケットティッシュを配布している。また、夜間パトロールはGW期間中と、町内の祭りの際に実施し、PTA役員や防犯協会、町駐在所と協力して行った。列車指導は、始発の最上駅－新庄駅間の列車に乗車して実施し、利用している高校生などのマナーがしっかりしているかなどの状況を確認した。

○あいさつ運動の様子



(2) 最上町青少年育成町民会議の活動

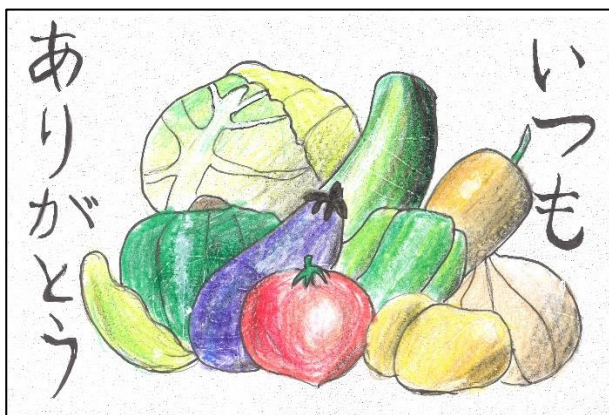
最上町青少年育成町民会議の独自事業で「絵手紙・標語コンクール」を実施した。絵手紙コンクールは、絵手紙を通して、家族がふれあう明るい家庭をつくること、そして、子どもが心身ともに健やかに成長していけることを目的としている。また、地域の中での「発見」や「感謝」など、目に見えるものや見えないものを絵手紙にすることによって、住んでいる場所の良さなどに気付き、考えるようにすることも目的の一つである。

標語コンクールは、子どもたち自身も標語作成を通して気付き、考える機会を作り、また、小・中学生のいじめ防止・SNSトラブルの根絶に向けた意識の啓発を促進することを目的としている。対象は町内小・中学校と新庄北高最上校の児童・生徒である。絵手紙は371点、標語は373点の応募があった。絵手紙に関しては、新庄市美術協会会長の佐藤先生に審査委員長になっていただき、審査を行った。今年度で2回目の実施だったので、どれもレベルが高い作品が多かった。標語の部では、町の教育委員が審査委員長になり、審査を行った。学年ごとにいじめ防止やSNSトラブル防止などの特色ある標語が多数あった。

今後は、絵手紙・標語コンクールの入選作品を冊子にしたり、標語コンクールの最優秀作品を掲載したポケットティッシュを作成したりして、それらを各家庭に配付する予定である。いじめ防止とSNSトラブル防止に向けて、家庭での会話のきっかけにしていいただければと願っている。

○絵手紙コンクール出展作品の一部

○令和3年度作成のポケットティッシュ



4. 終わりに

令和4年度の青少年健全育成事業を紹介してきたが、来年度も継続して実施していきたい。また、見守りなども変わらず実施していくが、昨今の青少年は外出して過ごすより、家庭で過ごす時間が長いと考えられる。そのため、最近は、SNSトラブルのような家庭における新しいトラブルなども発生している。夜間パトロールなどで、不良行為などを見つけて注意、指導するよりも、SNSトラブルや、インターネットトラブルなどの家庭の中で起こるトラブルに重きをおいた活動に力を入れていきたい。

最上町スキー強化委員会クロカン部 秋季強化合宿

最上町

1 はじめに

最上町スキー強化委員会は、最上町のスキー選手の育成・強化を図ることを目的としたアルペンスキー部、クロスカンリースキー部の2つの専門部会で構成されている。

各専門部会では、町内児童・生徒並びに町内出身学生、一般の競技スキー選手の前シーズンの各種大会結果等を考慮し「強化指定選手」の推薦を行っている。総会において了承を得た選手たちは、「強化指定選手認定式」終了後、各専門部会の強化事業に参加し、目的を達成するため、練習に励んでいる。

令和4年度は、アルペン部（小・中・高・大学・一般）16名、クロスカンリースキー部（小・中学生）11名が認定され、それぞれの指導者のもと、6月より活動を開始した。

なお、町スキー強化委員会アルペン部及びクロスカンリースキー部を対象として、町スキー選手の強化育成と競技力向上、競技スキー人口の拡大を図ることを目的に、最上町補助金の適正化に関する規則に定めるところにより、町が予算の範囲内で補助金を交付している。

2 事業のねらい

今年度、町スキー強化委員会クロカン部では、昨年、新型コロナウイルス感染症対策により中止せざるを得なかった強化事業の一つ、小・中学生秋季強化合宿を2年ぶりに1泊2日の日程で実施した。スキー技術向上のためのトレーニングや合宿での共同生活を通じて、自立心、助け合いの心を養っていくことを目的に実施している。併せて、合宿を通して練習の厳しさ、楽しさなどを体験、理解したうえで、中学校、高校に進んでもスキー競技生活を続けていきたいと思えるよう活動を行ってきた。そのような思いが、各選手に芽生えたならば、事業の成功といえる。

3 具体的な取り組み

合宿では、週1回の主に陸上トレーニングを中心とした練習会とは異なる内容で実施している。合宿初日は、赤倉温泉スキー場クロスカンリースキーコースを使用し、上り、下りでのポール（ストック）操作の練習を行った。また、選手（小学生）の中には初めての練習となるローラースキーを用いての走法練習も行った。2日目は、ロードでの長距離走、町民プールを使用しての水泳を含め、前回実施した合宿スケジュールを見直し、一部変更して行った。

夕食は、バーベキュー会場を貸し切って恒例のバーベキュー大会を行った。食事で力を蓄え、温泉入浴で疲れをとり、1時間ほど勉強時間にあて、就寝時間までは自由時間とした。



4 成果と課題

合宿終了後に「秋季強化合宿を終えて」という内容で、各選手に感想を記入させ提出させた。それをもとに、今回の秋季強化合宿の成果、課題を見つけ出すことにした。選手たちの感想は、下記のとおりである。（参加11名の選手より抜粋）

(1) 合宿を終えての感想

- ①とても疲れました。特に、ローラースキーとロングランです。つらい練習が続きましたが、終了後は、合宿に参加して良かったなという気持ちになりました。(小5男子)
- ②つらいこともあったけど、自分としては一生懸命にがんばったし、みんなと楽しく練習できたのでうれしかったです。(小4男子)
- ③改めて合宿のつらさを知りました。前回(4年生時)よりもしっかりと練習できたと思います。6年生として適切な行動ができました。(小6女子)
- ④ローラースキーの練習では、日頃あまり使ったことのない筋肉を使い疲れましたが、勉強になりました。(小6男子)
- ⑤ローラースキーや長距離走のトレーニングでは、体力、精神力も付き、今後の部活動でも合宿で学んだことを生かし、がんばっていきたいです。(中学男子)

(2) 合宿を通じて学んだこと

- ①あきらめずに練習を続ければ楽しいことが待っているということです。(小6女子)
- ②2日間の練習を行い、自分はまだ体力が必要なことがわかりました。(小6女子)
- ③みんなで共同生活をしてみて、つらい練習もいつもより楽しくできて、スポーツをすることがもっとも好きになりました。(小4男子)
- ④合宿生活をして、自分は一人ではだめだな、いつも親に頼っているなど感じました。ローラースキーの操作、練習方法を知り、勉強になりました。(小5男子)

(3) 今後の目標、課題など

- ①初めてのローラースキーでしたが、うまくできなかつたので、練習をして冬までには上手になりたいです。(小4男子)
- ②しっかりと練習して、各種大会で良い結果を出すことです。(小5男子)
- ③ロングランの練習では、疲れてスピードを出すことができず速く走ることができませんでした。長時間でも走れるように体力をつけたいです。(小5女子、他)
- ④冬の本番では合宿で行ったことを思い出しながら、がんばっていきたいです。(小6男子)
- ⑤来年は中学生だけど、合宿で学んだことを忘れずに、がんばりたいです。(小6女子)
- ⑥部活動や、合宿を通じて体力をつくり、そこで学んだこと、修正点を意識することでレベルアップをはかり、県、東北、全国で通用するような選手を目指します。(中学男子)

以上、感想としては練習が楽しく、疲れたとの回答が多くあった一方で、仲間と共に練習したこと、合宿での共同生活が楽しかったとの声もある。今後の目標についても前向きな姿勢が感じ取れ、選手にとっては「一歩前進するきっかけになったのでは」と受け取れる。

5 終わりに

ここ数年、アルペン、クロカン問わず小・中学校、高校と競技スキー選手の減少が目立ってきている。この傾向は、残念なことに当町のみならず山形県内や北海道、東北、北陸など全国的にみても言えることである。少子化をはじめ、スキー用品購入、通常練習時の経費(リフト券、食事代)、合宿費、遠征費、大会参加費など多大な費用負担の影響もある。ウインタースポーツでの若年層のスノーボードへの移行も考えられる。さらにスポ少、中学校の部活動においても、年間を通じて活動するスポーツ競技への入部が多い。当町の最上中学校では、部活動において今年度より二部制(例:夏はテニス部、冬はスキー部など)を開始する。

当町の赤倉温泉スキー場を会場に、令和5年2月に全国高等学校総合体育大会(インターハイ)アルペンスキー競技、令和6年2月に国民スポーツ大会冬季大会アルペンスキー競技が開催される。これらをつなぐきっかけに最上町の町技であるスキーが、以前のように盛り上がってくれることを願うばかりである。

舟形町しめ飾りづくり講座

舟形町

1 はじめに

「しめ飾り」には、お正月に家の中に歳神様をお迎えする際に邪気や厄災などが入ってこないようにするお守りの役割があるとされている。舟形町では、12月しめ飾りづくり講座を開催し、各家庭で自作のしめ飾りを飾っている。そして、お正月の松の内が過ぎると町内の各地区で実施しているお柴灯で、正月に飾ったしめ飾りや古くなったお守りなどと一緒にお焚き上げを行い、無病息災や家内安全などを祈願する風習がある。

2 事業のねらい

この事業は、地域住民が気軽に地域の文化に触れる体験ができ、さらに地域住民同士の交流を深めることをねらいとして毎年開催している。講師には、地元の「舟形町わら細工愛好会」をお迎えし、各地区の公民館で開催することで地域住民が参加しやすいように工夫している。また、親子講座を休日に開催することで、親子でわら細工の伝統に触れるきっかけにも繋がっている。

3 具体的な取り組み

事業内容 開催日程：令和4年12月10～23日（全7日間）

会 場：各地区公民館、公共施設

(1) 各地区公民館でしめ飾り講座の開催

- ①地区公民館でしめ飾り講座を開催した。
- ②完成したしめ飾りをもって集合写真を撮った。



(2) 親子しめ飾り講座の開催

- ①親子でしめ飾りづくりに挑戦した。
- ②完成した後、子どもたちから感想発表をしてもらった。



(3) 舟形町わら細工愛好会の活動

- ①町外の方にもしめ飾りづくりを指導している。
- ②しめ飾りのほかに草履や鍋敷きなどのわら細工づくりをしている。



4 成果(◎)と課題(△)

- ◎今年では75名の参加者があり、初めてしめ飾りづくりを体験した方も多く、「上手に作る事ができた」や「来年度も参加したい」との感想があった。
 - ◎毎年参加している方も多く、戸惑っている参加者に対して積極的に協力している場面があり、参加者の自主性と協調性を育むことができた。
 - ◎講座を通じて、地域住民が集まるきっかけにも繋がり、災害時の対応や地域の危険個所の確認など情報交換の場として活用され、地域の団結力が深まった。
 - ◎各地域が主体となって講座を運営することで、参加意欲の向上や地域人材の育成にも繋がった。
- △次世代のしめ飾りづくりの講師の担い手不足が懸念されている。昔から受け継がれてきた地域文化を地域全体で守り、次世代に繋げていく必要がある。

5 終わりに

町では「しめ飾りづくり」を通じて、子どもからご年配まで幅広い年齢層の方が気軽にわら細工づくりの体験ができ、地域の文化に触れるきっかけづくりにも繋がっている。また、「舟形町わら細工愛好会」が、わら細工の素晴らしさを指導し、広く地域の伝統を発信している。このような取り組みを今後も継続できるよう支援していきたい。

「縄文の女神」出土30周年・国宝指定10周年記念事業

舟形町

1 はじめに

今年、「縄文の女神」が平成4年8月に西ノ前遺跡から出土して30周年、平成24年9月に国宝指定されてから10周年の節目の年になった。町条例では、出土した8月4日を「舟形町縄文の女神の日」と定め、それを記念した「縄文の女神まつり2022」を開催し、記念講演会や土器づくり体験、出土当時の映像上映などを行い、縄文文化に親しむ記念事業を実施した。

2 事業のねらい

この事業は、国宝「縄文の女神」の価値を理解し、地域全体で縄文文化を盛り上げ、後世に縄文文化の価値を継承することをねらいとしている。「縄文の女神」の出土を記念した事業を開催することで、縄文時代に関する知識や理解を深め、縄文文化への興味・関心を高めている。また、記念事業を広く周知することで、町の情報発信や地域の活性化にも繋げている。

3 具体的な取り組み

事業内容 開催日程：令和4年8月6、7日（土、日）

会 場：舟形町中央公民館

(1) 国宝「縄文の女神」出土30周年及び国宝指定10周年オープニングセレモニー

①久寿玉開披や舟形中学校吹奏楽部による特別演奏を行った。(8/6)

②触れる国宝「縄文の女神」や国宝土器・土偶の展示を行った。(8/6・7)



(2) 記念講演、特別トークショー (8/6)

①土偶女子 譽田亜希子 氏の記念講演及び特別トークショーを行った。

②譽田亜希子 氏、高校生ボランティア「ふなっ子」、薫風窯 金寛美 氏による特別トークショーを行った。



(3) 親子で土器づくり、屏風づくり体験 (8/7)

- ①親子を対象に縄文の土器づくり体験を行った。
- ②国宝についての価値を学ぶため屏風づくり体験を行った。



4 成果

- ◎国宝「縄文の女神」の出土30周年と国宝指定10周年を広く町内外に周知することができた。
- ◎国宝「縄文の女神」の出土当時の映像上映や西ノ前遺跡の出土品展示、記念講演会などで縄文文化に関する知識を深めることができた。
- ◎国宝土器・土偶の展示や土器づくり体験など親子で縄文文化に触れることで、価値を再認識し、次世代に繋ぐ文化財保護の意識を醸成することができた。

5 終わりに

町から出土した国宝「縄文の女神」が、縄文時代から現代に、そして現代から未来へと繋がるように、これからも記念事業の開催や縄文文化における情報発信、事業展開を行っていききたい。そのためには、地域全体で縄文文化の知識と理解を深め、国宝として価値を守りながら、次世代の文化財保護の担い手育成が必要不可欠である。今後も国宝が出土した町として誇りをもって縄文文化を発信できるように、継続して事業を実施していく予定である。

「公民館まつり」

真室川町

1 はじめに

これまで真室川町では、9月から10月の期間に多数の社会教育関連事業が行われてきたが、以下の3つの課題を抱えていた。

- ①各事業の参加者が固定されがちで盛り上がり欠けること。
- ②特定の事業にしか参加しない方がほとんどであり、事業や団体ごとの交流が少ないこと。
- ③実施主体となる各団体の会員減少に伴い、それぞれの運営が難しくなってきたこと。



これらの課題を解決し、秋季の社会教育関連事業を再び盛り上げるための取り組みが必要となったことから、「公民館まつり」として同日・同一会場で開催することとなった。

2 事業のねらい

従来は個別開催されていた秋季の社会教育関連事業を同時開催することで、各団体の会員や参加者など幅広い年代の様々な方々の相互交流推進のほか、町民が率先して行っている文化活動の周知拡大を図った。

3 具体的な取り組み

10月2日(日)に、真室川町中央公民館を会場として以下の4事業を同日・同一会場で開催した。

①山形県児童生徒版画作品展表彰式および展示

県内の小中学校から応募された605点のうち、222点が入賞・入選した。当日は中央公民館大ホールにて表彰式を行ったほか、10月1日から10日までの期間、中央公民館研修室にて作品展示を行った。



②みて！みて！わたしの作品展展示

児童生徒による俳句のほか、書や写真、絵画や手芸作品など、町内4学校、12個人、4団体から合計278点の作品が出品された。出品された作品は、10月1日から10日までの期間、中央公民館研修室にて展示を行った。

③真室川町芸術文化協議会30周年記念式典および町民芸術祭

中央公民館大ホールにて、設立30周年を迎えた町芸術文化協議会の記念式典を行ったのち、加盟団体の会員による町民芸術祭(舞台発表11団体・展示発表4団体)を開催した。



④まむろがわ古本市

「まちなか図書館構想」に基づき、「本が好きな人を増やすための取組み」の一環として、中央公民館に隣接した真室川町歴史民俗資料館前の広場にて開催した。子どもから高齢者まで、だれでも参加できる「古本市」を開催することで、本が好きな人同士の交流や、本に興味を持つ人を増やす読書活動の推進を図っている。今年度実施した主なブースは以下のとおり。



- ・町図書室の除籍本リサイクル
- ・来場者によるマムログワクジラの貼り絵
- ・公民館まつりバッグでスタンプラリー
- ・本の付録抽選会

4 成果と課題

新型コロナウイルス感染症の影響がまだまだ大きい中、多くの方々からご来場いただくことができ、町社会教育施設の中心である中央公民館において秋の賑わいを作ることができた。また、事業の大きなねらいであった「各団体や参加者の相互交流」については、複数の事業が同一の会場で開催されており、自分が目当てとして来場した事業以外にも触れやすいものとなったことで、一定の成果があった。特に、従来来場が少なかった子育て世帯の方々が多く来場し、年配の方が中心となって運営して



いる事業にも参加することができ、非常に有意義なものとなった。

事業、ブースの内容やそれぞれの運営方法については、各団体との協議・連携をより深めていく必要があり、事業の拡充に向けた取組みを継続していく。

5 終わりに

施策の展開としては、今年度から開始された事業であり、次年度以降も事業を継続していく予定であるが、この公民館まつりが一つのきっかけとなり、町の社会教育事業の盛り上がりにつながることを期待するとともに、より若い世代にも参加していただき、各団体の会員確保や世代の連続性につなげていけるよう事業を展開していく。

2022陸上教室

真室川町

1 はじめに

真室川町では、子どもたちの基礎体力向上、陸上競技の普及に向けて平成16年から陸上教室を開催してきた。基本的な準備運動やストレッチ、ジョギングなどから専門的な競技力アップなど、各々のレベルに合わせてトレーニングを行っている。

今年度は、新型コロナウイルス感染症対策として検温の実施などに加え、熱中症対策も行いながら、全6回の日程で開催された。

2 事業のねらい

陸上教室を通して、準備運動やストレッチ方法からランニングの基本などを体験してもらうことで走り及び体力の向上を図ると同時に、走ることの楽しさを知ってもらう。また、陸上教室を通じて仲間づくりを行う。

3 具体的な取組み

○2022陸上教室

期日：令和4年7月9日～8月13日の毎週土曜日 全6回

時間：午前8時～午前9時30分

場所：秋山クロスカントリーコース・真室川中学校グラウンド

町内各小学校から10名の児童が参加し、講師に井上徹氏・磯谷莉朋氏を招き、全6回の日程で秋山クロスカントリーコース及び真室川中学校グラウンドで開催された。長距離コースと短距離コースに分かれ、準備運動や、スピードアップのためのトレーニング方法などについて学んだ。





4 成果（○）と課題（●）

○ラダートレーニングなどは回を重ねていくごとに、前回できなかったものができるようになるなど、児童たちの成長を目の当たりにすることが出来た。

○全10人の参加者のうち6人が皆勤賞で、児童のトレーニングについて、意欲的を持たせながら、練習に参加させることができた。

○トレーニングにおいて、児童たちの積極的に取り組む姿が見られた。

●スポーツ少年団の大会や試合と日程が重なるため、参加できる児童が限られてくる。



5 終わりに

事業のねらいである「走力・体力の向上」「仲間づくり」だけでなく、できなかったことができるようになる喜びを味わわせ、次のステージを目指して挑戦することにも体験させることができた。

走ることはどんなスポーツにおいても基本になる動作であるため、できるだけ多くの児童に参加してもらえるよう、開催日程を調整するなどの工夫が必要だった。

町のスポーツ振興のために今後も継続して行っていきたい。